

# 文芸

## 俳句

大漁を待ちて港の大焚火 池田 逸子  
 七草そろふて厨明りかな 伊藤 敬子  
 薄氷幾何学模様は風の枝 伊藤 敬子  
 立春日鱒の頭に雪淡し 今関満喜子  
 豆撒きや打たれし鬼の恵比寿顔 魚地 照子  
 独り居の雪積む音を聴く夜かな 江森 悦子  
 三寒に耐へて四温の小働き 川島 通則  
 あかときのしじまを開く淑気かな 向後 寛  
 日の匂ひ薄氷の下稚魚泳ぐ 越川せつ子  
 玄関に客の履物雪土産 小松 藤男  
 凶が出て百円おしむ初みくじ 佐瀬 輝夫  
 安産であれよ余寒の待合室 椎名万里子  
 藁入りてへの字くの字のうす氷 鈴木とし子  
 お日様にくすぐられるや薄氷 鈴木 利子

大利根の堤はてなし犬ふぐり 玉虫 栗扇  
 先走る季節の隅に薄氷 土屋美枝子  
 里山の木霊起こすよ雪しずく 土屋 義昭

明瞳のふまれて育つ犬ふぐり 戸村 静華  
 水仙の気ままに咲くや庭の隅 早川 勇  
 篝火の手練り寄せたる初御空 藤田 雅夫

## 短歌

ふる里は近くにあれど遠くなり 夫なき後は電話で語らう 内藤 くに  
 戦争も世紀も越えて喜寿なりし まだ見てみだし変わりゆく世を 越川 義則  
 ひとつぶの雨垂れ窓を伝いおり 生命あるものさまよつごとく 高梨 キヨ  
 .....  
 検察より先ずは記憶をたどること じやなきや惚けると娘はずばり言ふ 八角 三枝

訪ふ吾をいつも変はらず義姉上は 迎へくれます夫亡き今も 芹川 初子  
 チューリップの球根夜に芽ぶきしか 庭を掃きゆく熊手の先に 押尾 輝子

図書館は吾が家の書庫とし独り居の 吾は楽しみ折折通ふ 田崎 尚美  
 新年の祭礼に集う女等は 「寿の歌」雨と唱えり 加瀬 弘子

昨夜の雪踏まれし跡を吾もまた ふわりふわりと歩み重ねり 椎名美枝子  
 誰が乗るオートバイの爆音が 真夜の二時過ぎ通り去りたり 鈴木まこと

「永遠のゼロ」見終わりし劇場に 感動の渦広がりゆきぬ 浅野 榮子  
 姉がある介護施設に姉も居る 唯それのみも安堵としたり 青木 秀子

砂浜の砂の光りて海広し 九十九里浜冬晴れの中 西山満里子  
 橋の上行き交ふ車茂くなり 活気あふるる朝の始まる 斉藤つね子

## こうほう 博物館 72

### 春を告げる鳥

春、暖かくなって、まず 咲き出すのが梅である。そして梅の花と言えば、ウグイスが付きものである。ウグイスはほとんど鳴き声のみで、姿を見ることはない。それに代わって春を告げる鳥として見ることができ、それが、写真のメジロである。このメジロ、昨年の春町民会館の窓ガラスに激突して、気絶していたところを保護した時の写真である。幸いすぐに回復して、飛び立っていった。メジロは、スズメより小さく、日本で最も小さい鳥の一つで、広く東アジアに分布する。羽がウグイス色で、目の周りが白いことからこの名が付く、花の蜜が好物で、春真っ先に咲く梅によく見ることが出来る。このためウグイスと間違われた



(社会文化課 道澤 明)